

の願いを聞きとどけられ、みかえりの阿弥陀如来になられたと伝えられています。

みかえり阿弥陀如来は、もとは聖武天皇のご本尊で、奈良の東大寺の経蔵におさめられていました。しかし、永観律師が東大寺で功績をあげたため、永観に預けられることになりました。

寺伝によると、永観律師が阿弥陀如来を背負って京都へ帰る途中、東大寺の僧侶が取り戻そうと後を追ってきました。ところが阿弥陀如来は永観の背中にはりついて決して離れようとはされませんでした。しかたなく追っ手はあきらめて引き返したと伝えていきます。

あれこれ仏教用語

大袈裟（おおげさ）

大袈裟とは、実際よりも大変なようにいうさまを意味する言葉です。

袈裟（けさ）は、お坊さんが衣の上につけている法衣のこととで、「大袈裟」は文字通り大きな袈裟のことです。

お釈迦さまの時代には、道端に落ちている布切れをつなぎ合わせて衣を作っていました。その後、仏教が中国から日本へ伝来してから、袈裟は華美で装飾的なものとなり、儀式用に着用するようになりました。お坊さんがそのような袈裟をぎょうぎょうしくつけている様子から、規範の大きいこと、おおぎょうなことを意味するようになりました。

雑記抄

く智慧と知恵く

「智慧」と「知恵」。「ちえ」には二つの「ちえ」があります。

三つのリングをケンカせず、二人の兄弟に分けるにはどうすればいいでしょう。

一つずつ渡し、余ったリングは半分に切って分けます。これが「知恵」。

一つずつ渡し、余ったリングはお仏壇にお供えます。これが「智慧」。

仏教は「智慧」の宗教です。智慧とは心豊かに生きていく為の考えです。

「知恵」は時として「悪知恵」となることも・・・。

平成二十一年十一月一日発行
じょうどしゅうせいざんぜんりんじは
浄土宗西山禅林寺派

常林院

月影



第31号

しきそくぜくう

色即是空

しき くう

(色は空です)

くうそくぜしき

空即是色

くう しき

(空は色です)



はんにやしんぎよう

般若心経

色・・・この世のあらゆる物。対象物。

空・・・からっぽ。ゼロ。

空とはこだわらない心

般若心経は三百字足らずの短いお経です。その中の一節「色即是空、空即是色」は、般若心経の中でもとても大切な言葉です。現代の言葉に訳すと、「この世のあらゆる物はすべて空です」です。

「空」とは、何もない状態、からっぽ、という意味ですが、どういうことでしょうか。

たとえば、家族でカレーを食べるとします。同じカレーでも、辛いと感じる人にとっては「辛い

カレー」であり、辛くないと感じる人にとっては「辛くないカレー」です。食べる人によってカレーの存在は「辛いもの」「辛くないもの」というふうに色々です。

他にも、同じ景色を見てもきれいと思う人もいれば、きれいと思わない人もいます、同じ音楽を聴いても、良い音楽に聴こえる人もいれば、ただの雑音に聴こえる人もいます。

「空」とはつまり、この世にあるすべてのものは、見る人によって、その見え方、感じ方が違うのでその物の存在というのは無色透明のようであり、誰が見ても同じ色に見える「絶対的な存在」というものは、この世には存在しないということです。そして私たちの「心」も「空」といえます。

食べ物や賞味期限を越えた瞬間に腐ったように感じたり、まわりが良いと言えば良く見え、悪いと言えば悪く見えたりします。これは「人・物」が変わったのではなく、それを見ている私自身の「心」がころころ変わっているのです。

般若心経は、人それぞれ見方が違うのだから、自分の考えにこだわりすぎないで、すべて「空」とみなして生きていきましょうと言っています。

秋の彼岸会法要

秋の彼岸会法要を九月二十三日に勤めました。

一時からご先祖の水塔婆回向、二時から法話。

法話は、般若心経について、意味の解説や般若心経にまつわる話をさせていただきました。

ご多用中、ご参詣いただきました皆様、ありがとうございます。

西山上人のお誕生日の法要（降誕会） ごうたんえ

毎年、十一月九日は西山派の祖、西山上人（せいざんしょうにん）の降誕会（誕生日を祝う法要）が、本山永観堂において厳修されます。

境内の紅葉も赤くなり、永観堂が一番美しくなる季節の中、全国から檀信徒、僧侶があつまり、盛大に法要が営まれます。どなたでも参詣できます。

◎十一月九日（月）

午後十二時十分 お説教
午後一時 降誕会



京都の秋は永観堂

寺宝展

永観堂の重文・寺宝など展観

十一月七日（土）～十二月六日（日）

拝観時間 午前九時～午後四時

拝観料 一般千円 小中学生六百円

ライトアップ

本堂拝観と本尊みかえり阿弥陀如来参拝

十一月七日（土）～十一月三十日（月）

拝観時間 午後五時半～午後九時

拝観料 一般（中高生以上）六百円



どんなお寺？ 本山 永観堂

問) どうして〇〇寺ではなく、

永観堂というのですか？

答) 実は、永観堂（えいかんどう）という名は通称名です。正式名は禅林寺（ぜんりんじ）といい、あわせて「永観堂禅林寺」と呼ばれています。この禅林寺という名前から、私たちの宗派名を浄土宗西山禅林寺派（じょうどしゅうせいざんぜんりんじ）というのです。

「もみじの永観堂」で親しまれている永観堂禅林寺は、平安時代に建てられ、もともとは真言宗のお寺でした。

永観堂という名は、禅林寺の住職をした永観律師（ようかんりっし）の、仏の慈悲の

教えを実践され、念佛信仰をすすめられた遺徳を慕って、

いつしか禅林寺を「永観堂」と呼ぶようになりました。

ちなみに、南禅寺は禅林寺の南に建った寺なので南禅寺という名がついたといわれています。

問) 永観律師はどんなお坊さんだったのですか？

答) 十八才から日課として一万遍の念仏を称え続け、後には六万遍もの念仏を称えた為「念佛宗永観」とまで呼ばれました。

もとは奈良の東大寺におられ管長もされていました。



問) どうして、本尊のみかえり阿弥陀如来は、ふりかえっておられるのですか？

答) 永保二年（一〇八二）二月十五日の早朝、永観律師はいつもの通り、阿弥陀堂で本尊阿弥陀如来のまわりを、一人で一心不乱に「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ...」と念佛行道をしておられました。ふと何かの気配を感じられ、前を見ると、本尊の阿弥陀如来が壇から降りて永観を先導するように行道をはじめられました。あまりのありがたさに、夢ではないかと思ひ立ちどまると、阿弥陀如来は、すっと首を左にひねって、

「永観おそし」といわれました。「どうかそのお姿を、後世永くとどめたまえ。」という永観